

回復期病棟における入院1週間以内転倒患者の再転倒率とその要因分析

Analysis of recurrence rates and factors in patients who fell within 1 week of admission in convalescent wards

○井上 靖悟¹、鈴木 幹次郎¹、森 直樹²、近藤 国嗣¹、大高 洋平^{1,3}

¹ 東京湾岸リハビリテーション病院、² 慶應義塾大学 医学部リハビリテーション医学教室、

³ 藤田医科大学 医学部リハビリテーション医学I講座

【はじめに】

回復期リハビリテーション(リハ)病棟において、転倒予防は重要な課題である。中川ら(2010)は、回復期リハ病棟入院患者の転倒を調査し、転倒経験者の50%が再転倒することを報告している。また、転倒は入院初期に多く、総転倒数の24.6%が入院1週間以内に発生することを報告している。過去の転倒歴は転倒予測因子(Stapleton, 2009)となるが、入院1週間以内転倒者の再転倒率やその要因は明らかになっていない。入院1週間以内に転倒した患者の再転倒リスク要因を明らかにすることは、転倒予防の一助となる可能性がある。本研究は入院1週間以内に転倒した患者の再転倒リスク要因を明らかにすることである。

【方法】

2017年4月から2019年3月に当院の回復期リハ病棟に入院し退院した患者1213名を対象とした。評価項目は入院中の転倒歴と入院時転倒アセスメントスコア、Functional Independence Measure(FIM)、基本情報として年齢や性別、主要疾患(脳血管、整形疾患、廃用症候群)などを後方視的に調査した。解析は入院1週間以内転倒歴および再転倒歴を従属変数、転倒アセスメントスコア、入院時FIM、基本情報を独立変数とした単変量ロジスティック回帰分析を実施した。さらに関連($p < 0.05$)のあった項目を投入し、多変量ロジスティック回帰分析を行った。有意水準は危険率5%未満とした。

【結果】

対象期間における総転倒者数は326名、延べ571件であった。1週間以内転倒者は100名(30.7%)、その内48名(48%)が複数回転倒を経験し(延べ115件)、総転倒数の37.7%が1週間以内に転倒歴のある患者による転倒であった。多変量ロジスティック回帰分析の結果、1週間以内転倒の転倒リスク要因は、男性($p < 0.01$ 、オッズ比1.71、95%信頼区間1.13~2.61)と、FIM上衣更衣能力($p < 0.01$ 、オッズ比0.80、95%信頼区間0.72~0.89)が抽出された。その内、再転倒リスクの要因は、FIM社会的交流($p < 0.01$ 、オッズ比0.69、95%信頼区間0.55~0.87)のみ抽出された。

【考察】

回復期リハ病棟における入院1週間以内の転倒リスク要因は、女性よりも男性であること、上衣更衣能力が低いことが関連することが分かった。また、入院1週間以内転倒患者の再転倒率は約50%であり、入院時FIMの社会的交流が低値であるほど再転倒リスクが高いことが示唆された。これは、入院初期転倒患者の再転倒リスク把握の一助となる可能性を示し臨床的に意義があると考えられる。